ドボクのチカラで「子供に外遊びを！」PartⅢ　冒険遊び場の未来

福田道路㈱　　正会員　　北添　慎吾

1．はじめに　本当に、子供の外遊び環境は悪化しているのか？

「子供の外遊び環境は悪化しているか？」の質問に、９割以上の大人が「悪化している」と答える。はたしてそうなのだろうか？多様な塾や習い事、そして地域のスポーツクラブの充実、大型の公園、子供を対象にしたイベントの数々を見るかぎり、格差はあるものの今の子供を取り巻く環境は（見掛け上）恵まれており、更にシスティマチックに進化を続けている。

しかし、なぜ今の大人たちは「子供の外遊び環境は悪化している」と思っているのか？それを簡単に言い表すと、現在の子供たちが遊びの中で「自然の神秘さや不思議さに目を見はる感性（ｾﾝｽ･ｵﾌﾞ･ﾜﾝﾀﾞｰ:ﾚｲﾁｪﾙｶｰｿﾝ）」や「冒険と失敗」に触れる機会に恵まれていないと、多くの大人が感じているからではないだろうか？

この閉塞感がただよう今こそ、ドボクが先頭に立って子供の外遊び環境を変えていかなくてはならない。

写真１　冒険遊び場

写真２　水辺の遊び

写真３　砂浜の遊び

写真４　里山の遊び

2．管理型社会の現状　「冒険と失敗」が少ない遊び環境

何もかもがお膳立てされた環境（例：危ない物は撤去、危ない場所は立入禁止）では、子供の社会性はなかなか育たない。バーチャルな遊びや指導されるだけの習い事・スポーツでは本当の知識や社会性はなかなか身に付かないし、他人からの「尊厳」もなかなか得られない。我々大人はそれを放っておいて良いのだろうか？

3．子供の遊び環境を改善するために　冒険遊び場が市民性(シティズンシップ）を育む

日本初の冒険遊び場は、1975 年世田谷区の「羽根木プレーパーク」で実現した。

冒険遊び場とは、①誰でも遊べる野外の遊び場、②遊びを見守る大人がいる③地域に根付いた運営、を基本にたき火や穴掘り・水遊び他子供たちの「やりたい」気持を大切にし、禁止事項をなるべくなくした遊び場で、現在では関東を中心に２６０の活動団体が運営をしている。カタチより、子供が毎日思いっきり遊べる場所を我が町につくろうという大人の想いを大切にしている。冒険遊び場では、年齢や生活地域の異なる子供たちが自由に遊ぶことができ、ケンカやケガといった冒険と失敗を繰り返す。そしてその問題を当人同士で解決するといった社会性を身につけていくプロセスがある。つまり、そこには今後の日本の教育に必要とされる市民性(最近はシティズンシップと呼ばれている)を育む環境があると言える。

4．冒険遊び場を全国で広めていくために　課題及び問題点とその解決策

【4-1．課題及び問題点】

①誰もが参加できる場所に→なかなか実現できない常設化

社会性を身につけていく為には、多様な子供達が交わることが必要である。そのためにはプレーワーカー（遊びの環境づくりの専門家で、遊びの指導はしない）の存在が欠かせないが、現在のところ専任のプレーワーカーが少なく、ボランティアによる運営では限界（常設が困難）がある。

キーワード　冒険と失敗、冒険遊び場、やりたい気持、市民性、プレーワーカー、安全と刺激
連絡先　〒556-0011　大阪市浪速区難波中 3 丁目 9 番 1 号　　福田道路㈱　関西支店　TEL06-6649-1389

②誰もが安心して利用できる場所に→安全と刺激（危険回避の経験）の折り合い

管理社会・訴訟社会・設置者責任が問われる現在の社会情勢では、遊び場設置に対してなかなか前に踏み出せないのが現状で、先回りしたがる大人に安全･安心を与え、安全と刺激の折り合いをつける必要がある。

③誰もが認める公共空間になるために→知名度が低い

東京・神奈川を中心に常設の冒険遊び場が広がっているが、他の地方ではまだまだ少なく知名度も低いのが現状である。また自然環境の格差、地域住民の意識の格差、各自治体の理解の格差（情報不足）をどのように埋めていくのかも今後の課題である。

【４-２．解決策】：ドボクのチカラを使え！

①　職業人としてプレーワーカーを育てる仕組みをつくり、建設業の職人を活用する

プレーワーカーをひとつの職業として位置付けできるような仕組みをつくることで、市場の縮小が続く建設業の職人を活用することができる。彼らは様々な材料を利用して、子供による子供の遊び場や道具を製作するための環境をつくることができる。

②　（定年）退職後及び現役の土木技術者を活用することで安全・安心を与える

基本的に冒険遊び場では、子供を自由にさせておいて大人は観察に徹する事が重要になる。そこで、野外での致命的な危険を事前に発見するチカラ（ＫＹ活動・リスクアセスメント等）を持った土木技術者が重要な位置を占める。また事故が起こっても、最悪の事態を防ぐための技術を提供することができる。

③　全国の遊び場をつなげる：情報発信で存在感を高める

まず、土木技術者が中心となって、人が近づきやすい里山・里川・里海を多様な自然に戻すことが基本となる。そして様々な場所において、全国の外遊びに関する活動（冒険遊び場研究会・川のワークショップ・全国おやじの会等）を紹介していき、それぞれの連携を目指す。また、建設業者が地域貢献の一環として、余剰品・不用品・残土を有効利用することで新たな冒険遊び場の設置及び維持、管理が実施できる仕組みや環境をつくり、様々な媒体を使って社会にアピールする。

５．冒険遊び場の未来　新しい公園は不用、多様な空間や人を繋げることで冒険遊び場は無限に広がる

大人のチカラを上手に使えば（おやじの会・水辺の楽校等との連携や、職業人としてのプレーワーカーを増やして日本各地のエコツーリズム等と一体になる）日本のすべての空間が冒険遊び場になる。更に、ドボクのチカラを以下のように活用することで新しい公園を造らなくても遊び場は無限に広がる。ただし、安全対策や環境づくりに加え、粘り強く活動の趣旨を説明して社会の理解と支持を得ることが重要となる。

【５－１　都市空間の利用】：　空き地→街の冒険遊び場

ホームレスが多数存在する新宿や池袋に都市公園の冒険遊び場が実在する。そこには多様な子供たちが集まっており、少しの工夫で公園や空き地の環境は劇的に変わる。他の都市にも広めたい。

【５－２　河川・海辺の利用】：　近づきやすい海辺・川つくり→水辺の楽校→水辺の冒険遊び場

土木技術者は自然環境の保護及び回復に加え、水辺の自然遊び環境にも関心を持つことで、水辺の冒険遊び場（例：水辺の楽校）を広め、そして育てていく。漂着ゴミも上手に使えば遊び道具になる。

【５－３　里山の利用】：　間伐→トレイル→里山の冒険遊び場

荒れた里山に、自然を活かしたトレイルコースを整備し山の冒険遊び場を増やす。

【５－４　土木現場の利用】：　土木の現場→ジオパーク（地球の歴史を知る）→地質の冒険遊び場

土木の現場（法面・トンネル等）をまるごとジオパークにしてしまう。タイムマシーンに乗った気分を演出できれば、土木の現場が時空を超えた地質の冒険遊び場に変わる。

【５－５　自然系博物館とつながる】：　土木技術者＋土木系高等教育機関＋自然系博物館→知の冒険遊び場

土木技術者と自然系博物館と土木系高等教育機関が連携したイベントを実施することで、それぞれの場所に知の冒険遊び場（地域社会の多様な知的資源に対する総合的なアクセスポイント）が生まれる。

【参考】0 歳からの子どもの安全教育論、プレイワーク、第５回冒険遊び場づくり全国研究集会資料